

研究ノート

実践報告

『「震災遺産と問いづくり」の授業から考える震災伝承について』

小峰朱理菜*・筑波匡介**

1. はじめに

東日本大震災から14年が経過しようとしている。震災後被災地の岩手県、宮城県、福島県を中心に復興と共に「防災教育」の導入が進められてきた。こうした学習を進める上で震災を伝える様々な資料は生徒の興味関心を引き出し、思考を深化させる役割を果たす。デジタル化が進んだ平成年代での震災は数多くの資料を残した。こうした資料を用いて防災教育に取り組むことが現在求められている。今村・佐藤（2021）によれば、岩手県や宮城県では震災のアーカイブスを用いた防災教育は活発に行われており、災害の「自分事」化に一定の成果が出ている。福島県でも、福島県立博物館が所蔵する震災を伝える資料（以下、震災遺産）の利用や実際に被災した地域の人々と協力した防災教育が県内の様々な小・中学校で行われている。しかし、こうした防災教育の実践の中に高等学校の例は少なく、高等学校の教育活動において防災教育はまだまだ発展途上にあると感じている。また、福島県では「発達段階に応じた学校防災」を定めており、高校で求められる学校防災は避難訓練や教科横断的に取り組むよう義務付けられている（詳細は 表1 を参照）。

高校は小・中学校で身につけた内容を深化させ、

表1 高校段階の防災教育の重点

筆者作成 福島県教育委員会（2016）より引用

高等学校段階における防災教育の重点		
安全で安心な社会づくりへの参画を意識し、地域の防災活動や災害時の支援活動において、適切な役割を自ら判断し行動できる生徒の育成		
知識 思考・判断	危険予測 主体的な行動	社会貢献 支援者の基盤
・世界、日本の主な災害の歴史・原因の理解 ・災害時に必要な知識を備え、日常生活や災害時に適切な行動をとることができる	・日常生活において発生する可能性のある危険を予測し回避する ・災害時に地域や社会全体の安全について考え行動する	・事前の備えや災害時に支援について考える ・積極的に地域防災や災害時の支援活動に取り組む

自分だけでなく地域社会全体の防災を意識することが求められている。こうした地域社会全体の防災意識を身に付けるには、震災での経験をただ学ぶだけでなく、次の世代へと震災で起きた事実を繋いでいくことも必要だと考える。高校段階における防災教育には災害を「自分事」として捉えることに加えて、福島県で起きた震災の記憶を伝承する役割も担わなくてはならないと考えている。今後、一層増えていく「震災を知らない世代」に震災の記憶を伝えていく「伝承者」を増やし続けていくことも地域の防災を推し進めることに繋がっていくのではないだろうか。

こうした「震災の伝承」について、ゲルスタ（2024）は福島県は岩手県や宮城県とは異なり、震災の伝承が進んでいない現状にあると指摘している。福島第一原子力発電所事故による原子力災害は未だ帰宅困難地域が残り、避難指示が解除された地域でも未だ住民が元の生活を取り戻せていない現状など、復興途上であることから、「伝承」という段階にまで昇華されていない。また、原子力災害に対するネガティブなイメージを払拭するためか、原子力災害に関しては復興面が大きく注目され、震災当時の状況や教訓が排除されているという指摘がある。こうした現状に大きな進展を与えたのが「語り部」の存在である。福島県内の震災関係の施設で震災の「語り部」が活躍し、原子力災害の当時の状況をありのままに語り継いでいる。こうした「語り部」の活動は震災の伝承に大きな役割を果たしていることは勿論だが、今後震災から年月が経っていくほどに、「語り部」の活動には限界がある。「語り部」の話を語り継いでいくことで震災の伝承は果たせるが、一部の人々に限られてしまう。

こうした「震災の伝承」の問題点を解決する一助になり得るのが、今回、福島県立博物館と共に企画した「震災遺産と問いづくり」という授業である。本報告では主に令和6年2月に福島県立小高産業技術高等学校で実施した授業実践を中心に報告する。

*福島県立磐城高等学校 **福島県立博物館

2. 福島県立小高産業技術高等学校での授業実践

令和6年2月に福島県立小高産業技術高等学校で実施した授業について報告する。福島県立小高産業技術高等学校（以下、小高産業技術高校）は2011年の東日本大震災で甚大な被害を受け、さらに福島第一原子力発電所事故によって2016年7月まで避難指示が出されていた南相馬市小高区にある。2017年4月に小高工業高校と小高商業高校が統合し、相双地区全体の復興に寄与する人材育成を目標とし、2017年に文部科学省のスーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）に指定され、その後も同じく文部科学省のマイスター・ハイスクール事業や福島イノベーション人材育成実践事業などにも取り組んできた。震災復興の象徴として歩みを進めてきたこの小高産業技術高校であるが、震災から年月が経てば経つほど、震災当時の記憶があまりない生徒が入学するようになり、実際に本授業を実施した当時高校2年生であった生徒たちは震災時幼稚園生でほとんど記憶がないと答えている生徒も多かった。震災の爪痕が残り、復興最前線にある本校であっても、記憶の風化は進行しており、震災に関しても教科書で学ぶ「他人事」の事実として認識され始めていた。こうした現状から、ただ教員や震災を知っている大人が話すことを聞いて考えるだけでなく、生徒たちが主体となって震災の記憶について考え、そして伝承者になり得るような授業はないかと考案したのが本授業である。

昨年度の研究紀要にある筑波の実践報告「博物館における防災教育」の中で「震災遺産」を授業で活用することで実際に震災を経験していない世代や未災地の人々にもより具体的な災害に対する想像力の助けになると指摘した。小高産業技術高校は被災地にある学校とはいえ、非日常の震災に関して考える機会は少なく、やはり震災自体が遠い存在となっていることは否めない。こうした現状の打開策として、自分たちが生活している相双地区で起きたことをそれぞれの生徒の想像力で震災と向き合うことのできる震災遺産を利用した授業は有効だと考えた。また、同じく関谷・筑波の実践報告「震災遺産と問い」から、震災遺産からの問いについて考えることは生徒が主体的に震災について考え、「問い」に関する様々な視点での対話が生まれることで、震災だけでなく日常生活における防災意識の向上につながることを報告した。相双地区の生徒にとって、震災の影響は生活の端々にあり、空気のように当たり前に存在している。しかし、それが当たり前すぎて意識しないと考える存在となってしまった。そこで、震災遺

産というモノとの対話と問いを通した生徒同士の対話によって震災を「自分事」として捉え、日頃の防災意識へと繋げることができるのではないだろうかと考えた。

しかし、震災遺産からの問いについて考え、日頃の防災意識を向上させるだけでは、震災の記憶の風化を防ぐことに繋がらないのではないかと。相双地区に生きる生徒たちに震災の記憶の風化も「自分事」として捉えてほしかった。そうした思いから、今回のような「震災遺産に対する問いを生徒自らが創る」授業を考案するに至ったのである。

令和6年2月、「地理総合」という科目における防災分野のまとめとして、本授業を企画した。生徒たちはそれまで世界の地形や気候などを学習し、その集大成として日本の地理と災害分野について学習した。その単元のまとめとして本授業を設定し、全2時間で実施した。まず、生徒に提示する震災遺産を4種類に絞った。震災遺産は福島県立博物館企画展図録「震災遺産を考える－次の10年へつなぐために」を参考に選出した。選出した震災遺産と、筑波と共に考え用意した問いは其後の「生徒自身が問いを創る」という活動も考慮した上で、できるだけ高校生にとって身近に感じやすいものや小高区や学校に程近い浪江町に由来のあるものを選出した。

令和6年2月2日（金）福島県立博物館より4種類の震災遺産を実際に小高産業技術高校へ運び込み、高校2年生の5クラスで『出張！福島県立博物館！「震災遺産」について考える』と題した授業を実施した。授業の流れとしては、各クラスを5人程度の4～7グループに分けて、震災遺産A～Dをグループごとに観察してもらおう。まずは生徒に「どんな震災遺産か？」という問いを与え、自由に考えてもらった。例えば、震災遺産Dのグループでは「津波の被害でこのようにえぐれたのではないかと」という予想が出されるなど、生徒は目の前の震災遺産をくまなく観察し、活発に意見交換をしていた。その後、筑波が震災遺産A～Dの解説をそれぞれのグループで行い、「震災遺産の問い」についてまずは個人で考え、その後グループで共有した。生徒たちは最初に抱いた感想との違いを共有したり、新たな視点で再度震災遺産を観察したりして、震災遺産への理解を深めていた。また、グループには生徒だけでなく震災当時、小高工業高校や相双地区内の学校で勤務し目の前で震災の被害を目の当たりにした先生方にも入って頂いた。生徒にとって普段聞くことのない先生方の震災の体験談は新鮮だったようで、真剣な様子で話を聞く様子が見受けられた。こうした震災遺産との様々な形での対話、自己との対話、グループ

表2 震災遺産と生徒に与えた問い一覧

資料	資料名	資料写真	解 説	与えた問い	問いの意図
A	アリーナに落下した体育館照明と体育館に残されたバドミントンのラケット		富岡高校の体育館では、地震発生時、部活や授業でバドミントンが行われていた。大きな揺れで照明が次々と落下したため、生徒たちはすぐに避難した。同じ体育館には選手の士気を高めるために掲げた大会までのカウントダウンも残されていた。しかし、震災後選手たちは避難を余儀なくされ、いずれの大会も中止となった。また、体育館は数年もの間、ネットは張られたまま、ラケットは投げ捨てられたままの状態であった。	道具も場所もない。部活もできない！その時あなたはどんなことを考えますか？	当たり前にある日常が明日もあるとは限らない。部活という生徒にとって考えやすい題材を使って、日常の有難さや災害後の部活を頑張っていた高校生の気持ちを考えさせたい。
B	役割分担の貼り紙		避難所となっていた浪江中学校の貼り紙。当初は有志が率先してやっていた身の回りの作業を分担することにした。トイレの水くみや掃除、食事配給などが書かれているが、担当者を決める間もなく次の避難先である津島地区への移動が始まったため、名前などはほとんど書かれていない。（この貼り紙が貼られたのは夜。翌日の朝には次の避難先である津島地区へと移動が始まった。）	どうして名前が書かれていないのでしょうか？避難所で何かできることがありますか？	「空白」は福島が地震と原発事故の多重災害に見舞われたことを意味している。そのことに気付かせ、多重災害による苦勞について考えさせたい。その後、避難所では高校生にどのような役割を求めているのかについても考えさせたい。
C	みんなの夢		避難してきた子供たちのために、旧相馬女子高校の避難所では臨時学級が作られた。しかし、学校の再開が決まったため、4月14日に中村神社で花見をしてこの臨時学級は解散となった。それに伴い、子供たちは桜の絵とそれぞれの「夢」を書いた。遠い将来の目標より、あたりまえの日常を取り戻すことが当時の子どもたちの願いであった。	あなたの夢は何ですか？比較してどんなことに気がきますか？	自分の夢と当時の児童の夢が全く異なることに気付かせる。震災時、児童はどんな思いでこの「夢」を書いたのか考えさせたい。また、この臨時学級に在籍していた生徒の多くが、小高区の小学校に通っていた生徒だった。自分たちの通っている地域で何が起きていたのかについても気付かせたい。
D	牛がかじった牛舎の柱		南相馬市小高区にある半杭牧場の牛舎の柱。2011年3月12日、福島第一原発から20 km圏内のこの場所には避難指示が出された。牧場主である半杭さんは「牛をどうするか？」という戸惑いの中、刻々と深刻化する原発の状況を見て避難を余儀なくされた。半杭さんは悩んだ挙句、乳牛にわずかなエサを与え避難する選択を取ったが、結局は長い避難生活の中で牛たちはすべて餓死してしまった。牛舎の柱は痩せ細っており、横から見ると柱として辛うじて保たれているのが分かる。牛舎に残され餌をもらえない牛が空腹に耐えかねて柱を齧ったもの。本震災は動物やそれを生業とする人にも大きな影響を与えた。	どうして柱はこんなに削れているのでしょうか？あなたが牧場主だったら、牛を逃しますか？	原発事故による被害は人間だけでなく動物にも及んだことや動物の災害時の対応について答えない問いに向き合い、命の大切さなどを考えさせたい。また、牛を逃すか逃がさないかという人それぞれの答えが予想される問いを与えることで、自分と異なる考えもあることを理解させたい。

内での対話、そして生徒と教員との対話を通して、より深く震災遺産を理解し震災の影響を感じ取っていた。その後、こうした対話の共有をワールドカフェ方式で行った。自分たちが観察したものとは異なる震災遺産に触れ、その遺産の解説や問いに対するグループ内での意見を生徒同士で共有したことで、より主体的に震災と向き合う様子が見られた（震災遺産と生徒に与えた問いやその意図については 表2 を参照）。ここまでが1時間目の内容で、次の時間に生徒自身に「震災遺産の問いづくり」をじっく

り行う時間を設けた。まず、生徒には震災を経験し記憶が微かに残る最後の世代であることを伝え、震災を学ぶだけでなく「伝承する」役割も担っていることを伝えた。これを前提として、自分たちらしい「震災遺産の問いづくり」を行うように指示した。まず、震災遺産A～Dから1つ選んでもらい、「伝えたい相手」を想像しながら「問い」を考えるようにした。「問いづくり」に重要なのは、「誰に、何を伝えたいのか」ということである。そこを明確にしてから、「問い」を創るように伝えた。「伝えたい相手」

表3 生徒が考えた問い（抜粋）

資料	資料名	生徒が考えた問い
A	体育館照明 ラケット	・当たり前練習できる環境がなくなったら、何をするか？ ・あなたは明日、普通の日常を迎えられますか？ ・あなたは楽しく部活に励んでいますか？
B	役割分担の貼り紙	・避難した先は本当に安全ですか？ ・震災時、自分ができていることを考えて積極的に行動できますか？ ・あなたは震災時助け合うことができますか？集団生活に耐えられますか？
C	みんなの夢	・あなたは今、夢を叶えられる環境ですか？ ・なぜ当時の子供たちは遠い夢を書くのではなく、目先の願いについて書いたと思いますか？ ・日常を取り戻すためにあなたならどんな行動をしますか？
D	牛舎の柱	・あなたが動物の立場になったときどうしてほしいか？ ・あなたは食べ物なくなったら、どのようにして生きようと思いますか？ ・あなたが牧場主で、牛が死ぬかもしれないと思った時、何をしてあげますか？

は震災後に生まれた震災を全く経験していない世代「小高こども園の園児」、震災は経験していても記憶がない世代「出身中学校の後輩」、同世代だが震災は経験していない「他県の同世代の高校生」という自分たちとは異なる対象から「伝えたい相手」を選んでもらった。結果として、生徒が選んだのは「出身中学校の後輩」と「他県の同世代の高校生」が多く、「小高こども園の園児」を選んだ生徒は少数であった。やはり、低年齢層対象の問いづくりへの難しさが起因しているのだろう。また、「問い」をいきなり考えるのではなく、「震災遺産から何を伝えたいのか」という項目から考えるように指示し、できるだけ「問いづくり＝難しいこと」というイメージを抱かないように机間巡視をしながら逐一生徒に声をかけ続けた。

結果として、生徒は筆者の想像以上に震災について深く考えさせるような問いをたくさん考えてくれた。また、こちら側が想定していなかった視点での問いも多かった。特に震災遺産Dの問いでは、命の大切さや牧場主の心情を考えさせるような問いが占めるのかと予想していたが、実際には「震災で食べるものがなくなったらどうするか。」といった食の大切さに触れるものが多かった。こうした生徒個人で考えた問いは関谷の報告を参考に、Googleスライドに掲載し、良いと思った問いに「いいね」マークをつけて、クラス全体で共有した（震災遺産に対する生徒が考えた問いについては表3を参照）。

今回の授業に関する生徒の感想を見ると、「震災遺産を実際に見たことで、震災のことを改めて知ることができた」「震災は人だけでなく動物にも影響があったことを学んだ」など、震災遺産を実際に目の前で見て、解説をしてもらったことでより深く震災について考えられていたようである。また、「今の日常が「当たり前」ではないことを改めて感じた」「今、生きていることに感謝したい」「自分にできる

こと、自分にしかできないものが必ずある」といった、震災遺産の活動を通して防災意識の向上が見て取れた。そして、「(震災の)記憶がある最後の世代として、震災の恐ろしさを伝えていく必要があると感じた」「身近な子供たちや同世代の県外の人に伝えたい」というような、震災の伝承を意識するような感想が多くみられ、「震災遺産の問い」を通じて「震災を語り継がなければいけない」という意識の醸成に繋がる活動となった。

5. 今回の活動を通して全体の感想を書きましょう。

被災時は、子供で何も分からなかった今になって資料を読むことで、当時の人・動物・建物への影響が分かった。博物館に行っても「可憐な」くらいしか考えられなかったが、残された遺産の意味を知ったら大切な残すべきものだったと思った。グループで意見を言い合うことで、違った視点の考えもあり、良かった。

図1 小高産業技術高校生徒の感想（抜粋）

3. 長野県松本深志高等学校との合同授業

今回の「震災遺産と問いづくり」で生徒に様々な問いを創ってもらったが、そのフィードバックとして、長野県松本深志高校（以下、松本深志高校）の当時高校1年生で同じく「地理総合」を受講している生徒41名と合同授業を行った。内容は小高産業技術高校生が「他県の同世代の高校生」に向けて考えた「問い」を実際に松本深志高校の生徒に考えてもらった。両校の生徒のタブレット端末をグループごとにZoomで繋ぎ、松本深志高校の生徒に震災遺産B～Dの3種類についてそれぞれ写真から推察してもらい、その後、小高産業技術高校生から遺産の解説と「問い」の提示や意見交換を行ってもらった。どちらの生徒も生き生きと活動に参加しており、中には松本深志高校生から小高産業技術高校生に対して「震災の時の記憶はあるか？どんなことを感じていたのか？」などの質問がなされ、それに対して小

– 17 –

を育む防災教育推進事業 防災教育指導資料
第3版」, 福島県教育委員会

ゲルスタ・ユリア (2024) 「福島第一原子力発電所
における原子力災害の伝承——ツーリズムの可
能性」, 『福島復興の視点・論点 原子力災害に
おける政策と人々の暮らし』, 明石書店

今村文彦、佐藤翔輔 (2021) 「震災の記録・記憶をい
かに伝承するか——アナログ・デジタルアーカ
イブの融合」, 『総合検証 東日本大震災からの
復興』, 岩波書店

桜井愛子、佐藤健、北浦早苗、村山良之、柴山明寛
(2020) 「津波記録を活用した被災地の学校での
防災教育～災害伝承と命を守る防災教育の推進
に向けて～」, 『防災教育学研究』1巻, 1号, p.
53-64